

# 幼稚園児をもつ夫婦の協同育児が 主観的幸福感に及ぼす影響： 育児の計画における連携・調整に着目して

青木 聡子

## 【要約】

幼稚園児をもつ夫婦を対象に質問紙調査を行い、夫婦が育児の計画における連携や調整を行い、育児行動の分担を衡平に行う協同育児のどのような側面が配偶者の育児に対する評価に反映されるのか、また、協同育児と配偶者の育児への満足度は、主観的幸福感にどのような影響を及ぼすのかについて検討した。男女別に重回帰分析を行った結果、夫群・妻群のいずれにおいても、配偶者と育児の計画における連携や調整を図り、育児に関する情報や互いの考えを共有していることが配偶者の育児に対する満足度の高さにつながっていた。さらに、配偶者と育児の計画について連携や調整を図っていることは、心理的な健康状態のよさを意味する主観的幸福感を直接高めることも示された。また、夫群においては、夫婦で同じくらいよく子どもと遊んでいると感じていることが、妻が行う育児に対する満足度の高さにつながる傾向があることが示された。妻群においては、世話の分担が衡平に行われていることが、夫が行う育児への満足度の高さにつながることで、日頃の配偶者の育児に対する満足度が高く、要望や不満が少ないことが、心理的な健康状態のよさを意味する主観的幸福感を高めることが確認された。

キーワード：協同育児、主観的幸福感、夫婦

## 1. 問題と目的

育児を積極的にする男性を意味する「イクメン」という言葉が一般に浸透し、男性も育児をすることが当たり前という認識が広まってきた。とはいえ、依然として多くの家庭で主たる養育者は妻であるようだ<sup>(1)</sup>。妻が夫に期待する育児の内容は妻自身の収入貢献度によって異なり、貢献度が低い妻は「遊び」や「しつけ」への、高い妻は「世話」への期待がより強いこと<sup>(2)</sup>、片働きの夫の育児は「遊び」中心、共働きの夫の育児は「世話」と「遊び」の両方であることも報告されており、夫婦の就業形態によっても男性の育児の実態は異なる<sup>(3)</sup>。では、幼児をもつ夫や妻にとって、夫婦が共に育児を行うことはどのような意味をもつのだろうか。本研究では、生涯発達の視点から、より充実した生活を目指すことの重要性と、そこに至る要因の解明が重視されている<sup>(4)</sup>ことを踏まえ、心理学的な

健康度を意味する主観的幸福感との関連から検討していく。その際、夫も妻も同様に育児にコミットした際の個人への影響を見るため、育児の実行を夫婦で等しく分担する分担の衡平さをとりあげる。

夫婦関係という親密な関係を肯定的なものとして捉えられることは、個人としての自己を肯定すること以上に主観的幸福感に関連していることが明らかにされている<sup>(5)</sup>。澤田<sup>(6)</sup>によると、妻の主観的幸福感や心理的 well-being は、夫からの情緒的・道具的サポートによって直接高まるのではなく、サポートを受けた結果、妻が夫婦の関係性を肯定的に認識することによって高まるという。また、中年期の夫婦のデータではあるが、性別にかかわらず、個人がある事柄に時間やエネルギーを注ぐ程度、そしてそこから得られる満足感が、その個人の主観的幸福感を規定することが明らかにされている<sup>(7)</sup>。これらの知見を踏まえると、夫婦が共に育児を行う場合には、そのこと自体が直接主観的幸福感を高めるのではなく、配偶者の育児に対する満足度の高さを媒介し、主観的幸福感の高さにつながると予想される。

だが、配偶者から高い評価を得ることは容易ではない。幼い子どもを育てる時期には、親役割への適応と夫婦間の役割調整が必要となるため夫婦間の葛藤が顕在化しやすい<sup>(8)</sup><sup>(9)</sup><sup>(10)</sup>。妻の認知する育児の分担量の理想と現実のずれは、妻本人だけでなく、夫にとっても結婚満足度を低める要因になることを報告する研究もある<sup>(11)</sup>。さらに、時として妻は夫に子どもの面倒をみるように言いつつも、その育児の仕方に文句をつけ、そのことが夫を子どもから遠ざける要因になることが指摘されている<sup>(12)</sup>。つまり、共に育児を行っているからこそ、それぞれが最適だと信じる育児の仕方が異なると、それが原因で葛藤が生じる可能性がある。一方で、夫が育児のパートナーでよかったこととして、育児において苦手なことや、見落としがちなこと、あまり行わないことを担ってくれることを挙げる妻の姿も報告されている<sup>(13)</sup>。よって、夫婦の育児は形式的な分担のみで捉えられるものではなく、夫や妻の育児へのかかわりの程度や進め方をめぐる夫婦間での連携・調整という視点からも捉える必要があると考えられる<sup>(14)</sup>。

育児へのかかわりの程度や進め方をめぐる夫婦間での連携・調整について、ここでは育児の計画に着目する。育児には、世話をしたり、遊び相手をするといった子どもに直接かかわる行為だけでなく、育児の状況を確認したり、子どもが資源を利用できるよう手配する責任を果たすことも含まれる<sup>(15)</sup><sup>(16)</sup>。前者を育児の実行、後者を育児の計画とし、その関係を示したのが図1である。わが国の発達心理学研究では、夫婦間の役割分担や分担基準といった、育児の実行についての調整は取り上げられている<sup>(17)</sup>が、育児の計画における連携や調整については父親の育児参加の一部として扱われる程度で<sup>(18)</sup><sup>(19)</sup> 充分には検討されてこなかった。だが、計画における連携や調整を行っていれば、先述したような互いのかかわりの程度や進め方をめぐる葛藤を緩和・解決へと導きやすくなり、配偶者の育児をより肯定的に捉えられるようになると考えられる。またその結果、育児を含

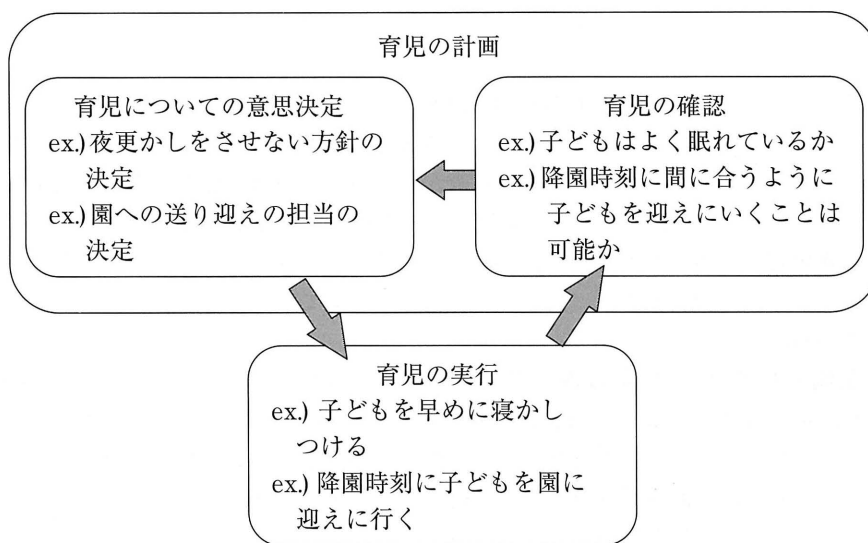


図1 育児における育児の計画と実行との関係

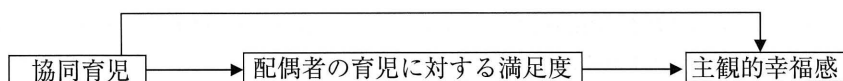


図2 仮説モデル

めた日常の生活をより充実したものとして捉えることができると予想される。

本研究では、夫婦が育児の計画における連携や調整を行い、育児の実行の分担を均衡に行うことを協同育児<sup>(20)</sup>と定義する。そして、協同育児のどのような側面が配偶者の育児に対する評価に反映されるのか、また、協同育児と配偶者の育児への満足度は、主観的幸福感にどのような影響を及ぼすのかについて、夫と妻との相違をみるため、以下のような仮説モデル（図2）に基づき検討することを目的とする。

## 2. 方法

### 手続き

幼稚園及び保育所を通じて0～5歳児クラスの幼児をもつ夫婦を対象に質問紙調査を実施した。配付数496組のうち、夫婦ともに回答を得られたのは248組だった（有効回答率50.00%）。調査用紙には、夫と妻のデータが対応できるよう予め整理番号を記し、統計処理の際に必要な番号で、この番号から個人を特定することのないよう無作為に配布している旨を明記した。また、プライバシーに配慮し、個別に密封できるよう両面テープのついた回収用封筒2枚を添えて配布し、家庭で記入後、封をして園に提出してもらったものを回収した。なお、対象学年に複

数在園児がいる家庭には、年長児を想定して回答してもらった。

#### 調査内容

**協同育児**（17項目） 夫婦が育児の計画における連携や調整を行い、育児行動の分担を衡平に行う程度を測ることのできる協同育児尺度<sup>(21)</sup>に、乳児をもつ夫婦2組を対象に行ったインタビュー調査から得られた項目を加えたものを使用した。評定尺度は、「かなりあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5段階評定である。ただし、質問項目の特性から、青木<sup>(22)</sup>に倣い「私も妻もしない」という選択肢も設け、分析時に「まったくあてはまらない」と同値に変換している。

**配偶者の育児に対する満足度**（16項目） 小坂<sup>(23)</sup>の親役割満足感尺度（Clemishaw & Guidubaldi Parent Satisfaction Scale）のうち、夫の子育てへのかかわりについての満足度を問う夫の子育てへのかかわり満足度、配偶者の育児に対する満足度を問うよう改変して使用した。評定尺度は「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」までの5段階評定である。

**主観的幸福感**（15項目） 青年から成人まで適用できる尺度として信頼性・妥当性が確認されており、心理的健康の個人差を測ることのできる、伊藤・相良・池田・川浦<sup>(24)</sup>の主観的幸福感尺度（SWBS：Subjective Well-Being Scale）を使用した。評定尺度は4段階評定である。

**その他の属性** 子どもの人数、子どもの性別、回答者の年齢など。

**自由記述** 「子育てをなさっていると、楽しいことや嬉しいこともあれば、大変なことや思うようにいかないこともあると思います。そのようななかで、奥様（ご主人）がいてくれてよかったな、お子様の母親（父親）でよかったな、と思うのはたとえばどんなときですか。」他2項目。

### 3. 結果と考察

#### 調査協力者

以下の分析では幼稚園を通じて配布した155組のうち、夫婦ともに有効な回答を得られた140組を分析対象とした（有効回答率90.32%）。夫の年齢は30代前半が14人（10.00%）、30代後半が49人（35.00%）、40代前半が45人（32.14%）、45歳以上が32人（22.86%）だった。妻の年齢は20代が1人（0.71%）、30代前半が17人（12.14%）、30代後半が74人（52.87%）、40代前半が47人（33.57%）、45歳以上が1人（0.71%）だった。対象児の平均年齢は4.49歳（SD=1.17）で、このうち男児は71人（50.71%）、女児は69人（49.29%）であった。

#### 各尺度の構造

以下の統計処理は、SPSS16.0Jを用いて行った。

**協同育児** 協同育児17項目について逆転項目である5項目の値を変換し、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。因子数は、固有値1以上の基準を設け、さらに因子の解釈の可能性も考慮して3因子とした。各項目のうち全

での因子において因子負荷量の絶対値が0.40に満たなかったものは削除し、繰り返し、同様の分析を行った。第1因子は「私と妻（夫）は、しつけの方針について十分に話し合っている。」などの項目で構成されているため「育児の計画における連携・調整」（ $\alpha = .856$ ）、第2因子は「子どもと屋外で遊ぶのは、わが家ではどちらか一方の役割である。（逆転項目）」などの項目で構成されているため「遊び相手の分担の衡平さ」（ $\alpha = .841$ ）、第3因子は「私も妻（夫）も同じくらいの頻度で子どもの着替えの準備や手伝いをする。」などの項目で構成されているため「世話の分担の衡平さ」（ $\alpha = .680$ ）と命名した。尺度得点は項目の平均値とし、得点が高いほど協同育児を行っていると感じていることを示す。

**配偶者の育児に対する満足度** 配偶者の育児に対する満足度16項目について逆転項目である7項目の値を変換し、主成分分析を行った。第1成分までの累積寄与率は55.50%と十分な値は得られなかったが、成分の解釈の可能性も考慮して、1成分を抽出した。各項目のうち第1成分において負荷量の絶対値が0.40に満たなかったものは削除し、再度、同様の分析を行って、「配偶者の育児に対する満足度」（ $\alpha = .937$ ）とした。尺度得点は項目の平均値とし、得点が高いほど配偶者の育児に対する満足度が高いことを示す。

**主観的幸福感** 今回は、伊藤・相良・池田・川浦<sup>(25)</sup>に倣い、日本人には馴染みにくいとされる至福感に関する3項目を除いた12項目について逆転項目である3項目の値を変換し、主成分分析を行った。第1成分までの累積寄与率は38.00%と十分な値は得られなかったが、成分の解釈の可能性も考慮して、1成分を抽出したところ、全ての項目の負荷量の絶対値が0.40に達したため、そのまま「主観的幸福感」（ $\alpha = .849$ ）とした。尺度得点は項目の平均値とし、得点が高いほど心理的健康状態がよく、主観的幸福感を感じていることを示す。

### 協同育児、配偶者の育児に対する満足度、主観的幸福感の夫婦間の比較と相関

夫と妻を対応させて下位尺度得点を比較したところ、いくつかの変数に有意な差が見られた（表1）。具体的には、「世話の分担の衡平さ」（ $t(139) = 2.68$ ,  $p < .01$ ）、「配偶者の育児への満足度」（ $t(139) = 8.63$ ,  $p < .001$ ）、「主観的幸福感」（ $t(139) = 2.72$ ,  $p < .01$ ）で夫の得点が有意に高く、世話の分担を夫婦で同じくらい行っているという意識が高いこと、配偶者の育児に対しより満足していること、主観的幸福感を感じ精神的健康度がより高いことが示された。

また、夫婦間の回答傾向に相関があるかどうかを検討したところ、「育児の計画における連携・調整」（ $r = .56$ ,  $p < .001$ ）、「遊び相手の分担の衡平さ」（ $r = .45$ ,  $p < .001$ ）、「世話の分担の衡平さ」（ $r = .62$ ,  $p < .001$ ）、「配偶者の育児への満足度」（ $r = .32$ ,  $p < .001$ ）、「主観的幸福感」（ $r = .18$ ,  $p < .05$ ）のいずれの回答にも有意な正の相関が見られた。つまり、実際の育児における夫婦の協力関係についての認識や互いの育児への満足度、主観的な幸福感を感じている度合いには、夫婦間

表1 協同育児，配偶者の育児に対する満足度，主観的幸福感の平均点と夫群と妻群比較及び夫婦間相関

	t 値	(df)	夫 (SD)	妻 (SD)	相関係数
育児の計画における連携・調整	0.12	(139)	3.61 0.69	3.60 0.78	.56***
遊び相手の分担の衡平さ	-0.03	(139)	3.47 0.92	3.47 0.91	.45***
世話の分担の衡平さ	2.68	(139)	2.39 0.86	> 2.22**	0.87 .62***
配偶者の育児に対する満足度	8.63	(139)	4.26 0.63	> 3.63***	0.82 .32***
主観的幸福感	2.72	(139)	3.21 0.33	> 3.11**	0.34 .18*

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

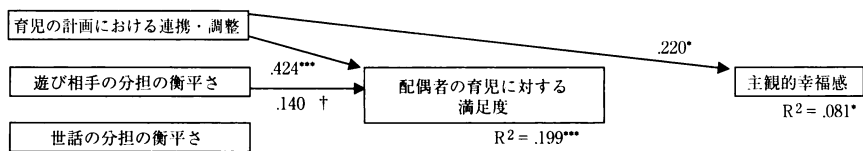
で共変動の関係があることが示された。ただし、協同育児の「育児の計画における連携・調整」と「遊び相手の分担の衡平さ」については、夫婦間の平均値に有意な差はみられず、夫婦間である程度共通の認識がもたれていることが確認できたが、「世話の分担の衡平さ」については夫の方が夫婦で同じくらい行っているという意識が高いことに注意が必要である。

### 協同育児と配偶者の育児に対する満足度や主観的幸福感との関係の男女別による比較

夫婦が育児の計画における連携や調整を行い、育児行動の分担を衡平に行う協同育児のどのような側面が配偶者の育児に対する評価に反映されるのか、また、協同育児と配偶者の育児への満足度は、主観的幸福感にどのような影響を及ぼすのかについて調べるために、男女別に強制投入法による重回帰分析を繰り返した。VIF 値は1.169~1.594で、いずれの群のパスも多重共線性の問題はないと判断した。5%水準で有意なパス係数（標準偏回帰係数）を示したのが図3、図4である。

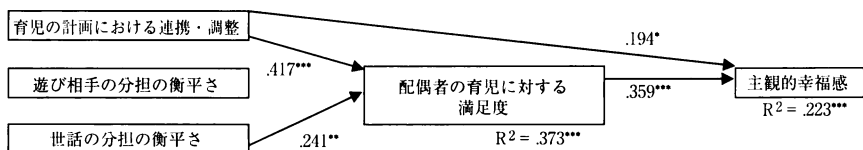
まず、夫群・妻群のいずれにおいても、配偶者と育児の計画における連携や調整を図り、育児に関する情報や互いの考えを共有していることが配偶者の育児に対する満足度の高さにつながっていた。配偶者の育児に対する満足度を問う因子には、子どもへのかかわりの頻度やしつけ方や育児能力に関して「もっとこうして欲しい」といった要望を問う項目（逆転項目）も含まれていたことから、夫婦で育児に関する互いの考えを話し合い、意向のすり合わせをしようとしているほど、実際に配偶者が行っている育児に対する不満が解消され易くなり、満足度が高まるのだと考えられる。よって、夫婦で育児を行う際には、配偶者が望む仕方や内容を踏まえた上で子どもにかかわることが重要である<sup>(26)</sup>ことが確認された。

さらに、配偶者と育児の計画について連携や調整を図っていることは、心理的な健康状態のよさを意味する主観的幸福感を直接高めることも示された。主観的幸福感は、人生に対する前向きな気持ち、自信、達成感、人生に対する失望感のなさの4領域から作成されている<sup>(27)</sup>。夫婦にとって、育児の計画についての話



\*\*\*p<.001, \*p<.05, †p<.10

図3 協同育児、配偶者の育児に対する満足度、主観的幸福感の関係を示したパスダイアグラム (夫) N=140



\*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05

図4 協同育児、配偶者の育児に対する満足度、主観的幸福感の関係を示したパスダイアグラム (妻) N=140

し合いの場合は、育児についての意思決定や、子どもの様子を含めた育児の状況の確認の場であることから、話し合いを通じて養育者としての責任や育児にまつわる喜びや楽しさが再認識されることによって、主観的幸福感が高まると考えられる。

また、夫群においては、夫婦で同じくらいよく子どもと遊んでいると感じていることが、妻が行う育児に対する満足度の高さにつながる傾向があることが示された。専業主婦家庭の夫の育児は休日の遊び相手を中心で、世話はしたがない傾向にあることが報告されている<sup>(28)</sup>。夫は育児の負担や制約を、実際に育児をすることで実感するという<sup>(29)</sup><sup>(30)</sup>。遊びとはいえ、妻と同じくらい子どもとかかわっている夫は、日頃、世話を含めて育児を担ってくれている妻の大変さや努力に気付きやすく、そのことが妻の育児に対する満足度につながっているのかもしれない。

一方、妻群においては、世話の分担が衡平に行われていることが、夫が行う育児への満足度の高さにつながることを示された。多くの家庭で主たる養育者は妻であることから<sup>(31)</sup>、幼稚園児をもつ妻の多くは主たる育児の担い手であることが予想される。無論、夫は主たる稼ぎ手としての役割を担っているわけだが、休みなく育児を担う妻にとっては、自分ばかりが子どもの世話をしているのではなく、夫婦で共に世話をしているという感覚を抱けることが重要であるといえる。本研究で取り上げた協同育児の「育児の計画における連携・調整」と「世話の分担の衡平さ」との間には有意な正の相関があること、「配偶者の育児に対する満足度」を問う項目には、子どもへのかかわりの頻度だけでなく、育児の仕方や育

児能力に関する項目が含まれていたことを踏まえると、夫婦間で子どもに関する情報や互いの考えをある程度共有した上で、世話が行われており、そのため、夫の育児の仕方も含め妻が満足できているものと考えられる。

妻群においては、日頃の配偶者の育児に対する満足度が高く、要望や不満が少ないことは、心理的な健康状態のよさを意味する主観的幸福感を高めることが確認された。先行研究では、妻にとって夫婦関係を肯定的に捉えられることが主観的幸福感を高める重要な変数であることが報告されている<sup>(32) (33)</sup>。「配偶者の育児に対する満足度」は夫婦関係を直接問うものではないが、主たる育児の担い手である妻にとって、夫を信頼できる育児のパートナーとして認識できることは、日々の生活を営む上で重要なだろう。

以上のことから、夫にとっても、妻にとっても、配偶者と共に遊びや世話を通じて子どもに積極的にかかわることが即、自らの幸福感につながるわけではなく、夫婦間で育児の計画における連携や調整を図った上で育児をすることが重要であることが確認された。

最後に、今後の課題について述べる。まず、今回は予想に反し、夫においては「配偶者の育児に対する満足度」から「主観的幸福感」につながるパスは確認されなかった。多重役割の研究において、仕事をもつ人の主観的幸福感へは、仕事に関する要因の影響が大きいことが報告されている<sup>(34) (35)</sup>。ことを踏まえると、夫については、今後、仕事に関する変数や共働き夫婦のデータも含めて検討していく必要があるだろう。

次に、協同育児の多様な在り方について、その実態を明らかにし、関連する要因を検討することが挙げられる。本研究では、協同育児の要素の一つとして分担の衡平さ(ここでは「等しさ」)を取り上げ、その意義についても確認してきたが、全てのカップルにとって育児の分担が等しくあることが一番よいということとはできない。小笠原<sup>(36)</sup>が指摘するように、家計リスクを最小限に留めるために、夫婦共に仕事と育児の両方を行うことによって、リスクの分散を図る戦略をとる夫婦もあれば、どちらかが仕事に専念することによって、生計維持を担う者のパフォーマンスを上げる戦略をとる夫婦もあり、後者の場合、生計維持を担う者が育児にかけられる時間と労力は自ずと限られたものとなる。野末<sup>(37)</sup>が指摘するような夫婦がお互いの育児の分担について納得しているかどうかを問う視点を導入しつつ、それぞれの夫婦にとっての協同育児の形が、夫婦や子どもにとってどのような意味をもつのかについても明らかにしていくことが求められる。

## 引用文献

- (1) 内閣府.(2002). 国民生活白書(平成13年度版). 東京:ぎょうせい.
- (2) 大和礼子.(2008). 母親は父親にどのような「育児」を期待しているか?. 大和礼子・斧出節子・木脇奈智子. 男の育児・女の育児:家族社会学からのアプローチ. 京都:昭和堂. Pp.115-135.



- (3) 斧出節子. (2008). なぜ父親は育児をするのか?. 大和礼子・斧出節子・木脇奈智子. 男の育児・女の育児: 家族社会学からのアプローチ. 京都: 昭和堂. Pp.91-114.
- (4) 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至. (2003). 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. *心理学研究*, 74, 276-281.
- (5) 遠藤由美. (1997). 親密な関係性における高揚と相対的自己卑下. *心理学研究*, 68, 387-395.
- (6) 澤田忠幸. (2006). 既婚女性の well-being と親になる意識の発達: 夫婦関係との関連から. *家族心理学研究*, 20, 85-97.
- (7) 伊藤裕子・相良順子・池田政子. (2004). 既婚者の心理的健康に及ぼす結婚生活と職業生活の影響. *心理学研究*, 75, 435-441.
- (8) Belsky, J. & Kelly, J. (1995). 子供をもつと夫婦に何が起こるか (安次嶺佳子, 訳). 東京: 草思社. (Belsky, J. & Kelly, J. (1994). *The transition to parenthood*. New York: Delacorte Press.)
- (9) Cowan, C. P. & Cowan, P. A. (2007). カップルが親になるとき (山田昌弘・開内文乃, 訳). 東京: 勁草書房. (Cowan, C. P. & Cowan, P. A. (1992). *When partners become parents: the big life change for couples*. New York: BasicBooks.)
- (10) 稲葉昭英. (2009). 夫との関係・妻との関係. 藤見純子・西野理子 (編). 現代日本人の家族: NFRJ からみたその姿. 東京: 有斐閣. Pp.103-130.
- (11) 相良順子・伊藤裕子・池田政子. (2008). 夫婦の結婚満足度と家事・育児分担における理想と現実のずれ. *家族心理学研究*, 22, 119-128.
- (12) Gottman, J. M. & Silver, N. (2007). 結婚生活を成功させる七つの原則 (松浦秀明, 訳). 東京: 第三文明社. (Gottman, J. M. & Silver, N. (1999). *The seven principles for making marriage work*. New York: Crown Publishers.)
- (13) 青木聡子. (2011). 乳幼児をもつ夫や妻にとって配偶者が育児のパートナーでよかったこと: 自由記述への回答から. *学校教育学研究論集第24号*, 東京学芸大学大学院, 東京, 101-110.
- (14) 青木聡子. (2009). 幼児をもつ共働き夫婦の育児における協同とそれに関わる要因: 育児の計画における連携・調整と育児行動の分担に着目して. *発達心理学研究*, 20, 382-392.
- (15) Lamb, M. E., Pleck, J. H., Charnov, E. L., & Levine, J. A. (1987). A biosocial perspective on paternal behavior and involvement. In Lancaster, J. B. (Ed.), *Parenting across the life span: biosocial dimensions*. Hawthorne, New York: Aldine Publishing. Pp.111-142.
- (16) Parke, R. D. (2002). Father and Families. In Bornstein, M. H. (Ed.) *Handbook of parenting 2nd ed.: Vol.3 Being and becoming a parent*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.27-73.
- (17) 柴山真琴. (2007). 共働き夫婦における子どもの送迎分担過程の質的研究. *発達*

- 心理学研究, 18, 120-131.
- (18) 森下葉子. (2006). 父親になることによる発達とそれに関わる要因. *発達心理学研究*, 17, 182-192.
  - (19) 尾形和男. (1995). 父親の育児と幼児の社会生活能力：共働き家庭と専業主婦家庭の比較. *教育心理学研究*, 43, 335-342.
  - (20) 前掲 (14)
  - (21) 前掲 (14)
  - (22) 前掲 (14)
  - (23) 小坂千秋. (2004). 幼児を持つ母親の親役割満足感を規定する要因：就労形態からの検討. *発達研究*, 発達科学研究教育センター, 東京, 18, 73-87.
  - (24) 前掲 (4)
  - (25) 前掲 (4)
  - (26) 前掲 (13)
  - (27) 前掲 (4)
  - (28) 前掲書 (3)
  - (29) 冬木春子. (2005). 乳幼児をもつ父親の育児ストレスとその影響：父親と子どもの関係性に着目して. *家族関係学*, 24, 21-33.
  - (30) 冬木春子. (2008). 父親の育児ストレス. 大和礼子・斧出節子・木脇奈智子 (編). *男の育児・女の育児*. 京都：昭和堂. Pp.137-159.
  - (31) 前掲書 (1)
  - (32) 前掲 (5)
  - (33) 前掲 (6)
  - (34) 前掲 (7)
  - (35) 伊藤裕子・相良順子・池田政子. (2006). 職業生活が中年期夫婦の関係満足度と主観的幸福感に及ぼす影響：妻の就業形態別にみたクロスオーバーの検討. *発達心理学研究*, 17, 62-72.
  - (36) 小笠原祐子. (2009). 性別役割分業意識の多元性と父親による仕事と育児の調整. *季刊家計経済研究 WINTER*, 81, 34-42.
  - (37) 野末武義. (2008). 乳幼児を育てる段階：「親になる」とは. 中釜洋子・野末武義・布柴靖枝・無藤清子. *家族心理学：家族システムの発達と臨床的援助*. 東京：有斐閣. Pp.79-96.

#### 付記

- 1 調査にご協力くださいました皆様に、心よりお礼申し上げます。
- 2 本研究は、日本乳幼児教育学会第19回大会にて発表した研究にデータを加え、再分析を行ったものである。